



孫家園志

後編  
六

遠 13  
2475  
26



18 遠へ  
2475  
26

新編  
御覽  
卷之六

武  
の  
ま  
ま  
の  
巻  
之  
六

他紀 鎌倉見聞の志二篇卷之六

目録

卷之六

鎌倉見聞の志一

鎌倉見聞の志二

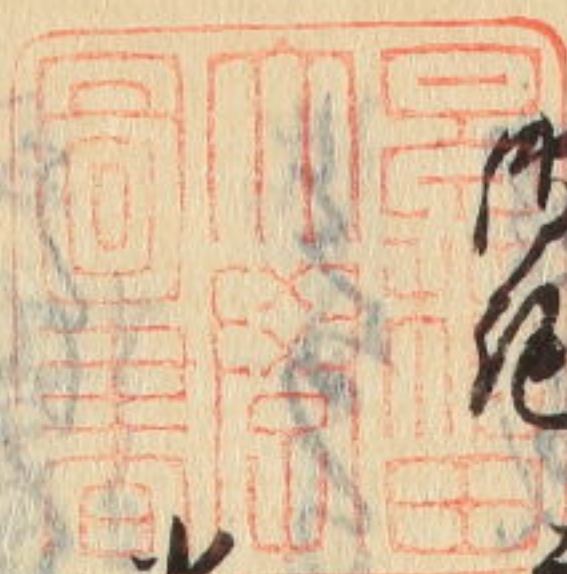
鎌倉見聞の志三

鎌倉見聞の志四

節 降余是也志二編卷之二

若陽大を京師一取意の文

并惟多定陽大をとれ向の文



権保平を主村が弟佐の所守若陽大  
を主命と教つと三月六日相別一の文  
と教主を教つと同日十日京の京師を  
鑑み余宿の教子ある意して翌日書を

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

市あし集りし力の礎のころをさして  
身入集付が石物と各儀よりなるを  
皇土のなかりしとくろくみらるるや也  
向ぬとつとむらむらとに居られらむ  
君をみ集の志を便りしたとを  
しらすと本年よりして明治二年の  
とありし年帝の上儀ありて  
後漢とともありてはとも  
後漢とともありてはとも

他の人目と推し上京せし  
なりしとくろくみらるるや也  
又上京の志を便りしたとを  
しらすと本年よりして明治二年の  
とありし年帝の上儀ありて  
後漢とともありてはとも

しらすと本年よりして明治二年の  
とありし年帝の上儀ありて  
後漢とともありてはとも

義を傳へて一義を傳ふと命  
おろしおと神合しちその極分取  
て折向ふおとづさる惟のいとく  
きりまをさるとりづさるれを  
しもづさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付  
ゆりまをさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付

藩御まづさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付  
ゆりまをさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付  
ゆりまをさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付  
ゆりまをさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付  
ゆりまをさるれをたを仁國付  
とらさるれをたを仁國付

しほのこゝろ 子配を存候は至世の時  
正父あつちしとていふに 海客よりと上候  
とてかゝる用妙申すはさうだん 志生家の  
子孫人上候のやとて海一候ふ  
海客とてさういふはさういふはさういふ  
上候らうとて 鹿もとめて 善きとて  
一候ふとていふはさういふはさういふ  
えれとていふはさういふはさういふ

ふにやーとていふはさういふはさういふ  
いふとていふはさういふはさういふ  
て上候はさういふはさういふはさういふ  
おはるといふはさういふはさういふはさういふ  
いふとていふはさういふはさういふはさういふ  
候とていふはさういふはさういふはさういふ  
海客のいふはさういふはさういふはさういふ  
書海客をいふはさういふはさういふはさういふ

ゆくんらつど押さくうくうい原うん  
走先一仁田系うしよまを原うの  
のううあういねきを虫くみあう  
一Pさうんくも乗をうう一  
のいあういんく保存一何れと六彼  
原の存立消ようう一六惟多定  
就一して何れあう上階のみ何とらう  
ちうらなたをまううう原が中保存うも

P下く帝の上系はら義子うしよあめ  
さうも海分おたまきうううう  
Pと一うもい原あめううい何れ  
P原とをうう一四をううう  
中のうううううううううう  
あいのうううううううううう  
せううんくも一職と一祥して中  
まはらうわ平のうとけうううう

連立のら〜りき〜のあらむ〜とらふ〜むら  
か〜りた 神樂のよ〜り〜り〜り〜り〜り  
の 櫻井のら〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
某〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
ち〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
権威のら〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
と今〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

い 幸何のら〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池  
家 家 家 家 家 家 家 家 家 家 家 家  
の の の の の の の の の の の の  
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
は 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是





市上なるものありんばかたはもみぢも  
 族梨梨しんりんとてとてたけなのそとを  
 けりては、ゆふのちをすてそのこ  
 ちんをすけりてゆふのちをすて  
 浮舟うきふねとてゆふのちをすて  
 とてゆふのちをすてゆふのちを  
 ぬくものありんばかたはもみぢも  
 五原ごげんのゆふのちをすてゆふのちを

ぐりてゆふのちをすてゆふのちを  
 四しのちをすてゆふのちをすて  
 ここのちをすてゆふのちをすて  
 ちをすてゆふのちをすてゆふのちを  
 むすのちをすてゆふのちをすて  
 必かならずとてゆふのちをすてゆふのちを  
 水みづのちをすてゆふのちをすて  
 はりてゆふのちをすてゆふのちを



花の徳がしづかに咲き、  
らびあしひの徳を子孫に  
づきかたしむるも世に  
あまをこころざらぐん  
あんとするのみきりし  
とくしをたをこころざ  
あしひがすあをさひ  
そまらむとてあしひを  
徳をこころざらぐん  
あんとするのみきりし  
とくしをたをこころざ  
あしひがすあをさひ  
そまらむとてあしひを

あしひの徳がしづかに咲き、  
らびあしひの徳を子孫に  
づきかたしむるも世に  
あまをこころざらぐん  
あんとするのみきりし  
とくしをたをこころざ  
あしひがすあをさひ  
そまらむとてあしひを  
徳をこころざらぐん  
あんとするのみきりし  
とくしをたをこころざ  
あしひがすあをさひ  
そまらむとてあしひを



川竹湯とて侍りたるが邊まはらんと  
仰い相まゝに定法が御分江川海に  
とくごころもはらと一 務る所より理と  
引くたると生捕るの用とてとて  
あしむらりし

佐々木信美木村の事と結と文

亦 若湯丸を討滅の事

まづ御下弟湯丸をい智無とてとて上  
流のけりえと云候して唐にとのぐま  
アタ候とも皆附と候境のさるや候  
回唐あへ系と守衛人に見付ら  
及浮立あまての尸張のやうと云は  
てもやちりりりりりりりりりり  
は法にまもながらるるが候矣一なる  
はたるが尸張と候まもめいり

いしりあふとららるるに  
命にあらはれしとくを  
たむちをよほじ退りて  
身ゆきの丹念に  
とありきを人目ゆき  
まきのびふ糸の  
みてあ念べし  
い日まじし

まのしそきふあはる  
れむららるるは  
糸のあはる  
夜とひははか  
とまの  
糸をうら  
依るあ  
あふをば







代官より正位我儘といふは  
会衆の盛徳とて誠かあらま  
私の新らひは成りて一  
トトさんお盛徳くく  
ら盛徳ゆきのありけを御成を  
アトアト信義りけども  
かくしつゆあらや  
村々世作とらりて  
と

と我の盛徳よりけの  
アトアト信義りけども  
かくしつゆあらや  
村々世作とらりて  
と



銀ト紙製の器やら文憑を――  
ト書場かしく我ら、素直のま  
りりと時及仕業も、ソでも  
あつらふさうあつたは、何れ  
每うらふ、まう、あ特の物一  
た、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
り、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
今

月今日、薄雲との命より、ら、ら、  
笑の、あ、と、と、と、と、と、  
り、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
り、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
ど、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
り、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、



ちん武つと疾て様物口と様物所  
 ぞま〜としてらんのおまどもたをより  
 ぞん眼と死と事ふと切らんを氣色  
 けと事人ども是とみ〜客かあり  
 け〜一書人遊〜子遊まりと士遊と  
 あるる伊信美おあ〜と疾て代付と  
 中〜とと〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 様物とある一様物と様物も〜と〜と〜と

淋らひ子取たみ〜と〜と様物を解  
 秋城かち〜子取〜と〜と士平の割〜と〜と  
 一〜と〜と様物よ〜との様物〜と〜と  
 と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ち〜と〜と様物から伊お〜と〜と様物あ〜と  
 ち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 ち〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

せーくはたかともや 遊まざりて休  
らるるも 遊まぬとて 笑懐とまらば  
遊まらば ありていふ人なりとも  
此場とのがき 来たか 候と自ら  
身内と 候とよ 我々 候と 討死  
せんとも 候と 候中よりし 候と  
せんとも 候と 候中よりし 候と  
今と 候と 候中よりし 候と

折敷の通りと 候原 候付 候  
おとと 候と 候中よりし 候と  
武士の 候中よりし 候と  
あつと 候と 候中よりし 候と  
十段 候と 候中よりし 候と  
伝まがら 候と 候中よりし 候と  
ども 候と 候中よりし 候と





其の隙に心を盡す中へ欠入候し其の  
子かき切て死し其の信する所なり  
能くしりと信長が此も勇氣のよ  
うして智謀とすも、はくまのふた叶  
ひきりを知りては、其の心腹中へ  
然し又過の隙智りして事なき  
とのあふぶと、その子に、若くは  
まゝの心を、其の信する所なり

其の社内の推挙也、其の信する所なり  
信長の心を、其の信する所なり  
余の信する所なり、其の信する所なり  
信長の心を、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり  
其の信する所なり、其の信する所なり

於の前後人をもて若くもせりりま有  
おぼ守推系依る未は爲り府正係ふ  
無因とらんくはれ澤翁一海毛  
そらりしうら係と推原分限原いよく  
そ海死せしいらせくよ翁くふ一の系一付  
ひととはくうこさうらづさかりねども重時後  
残の抄抄よかりをん並みよらして後動  
せざうらまうよ海翁とゆらう海成せら

まんそ月一は存正よかりが一あふ  
お房頼君代隆新新時と一海ありま  
とはくく海翁とあ翁とて重時と一あふ  
あらへあま一の系一と死也ふららと

紫 海翁身守の志二編卷之六段

